

『西周伝』の資料価値

—— テルナーテ号航海記の謎に挑む ——

蓮 沼 啓 介

1. 『西周伝』の紹介

『西周伝』⁽¹⁾は洋学伝習生の生きた記録である。西周は幕末開港を受けて留学生を派遣することが国益に適う事を力説して自らその先頭に立って洋学伝習の口火を切った人物である。著者である森鷗外も陸軍幹部生として独逸に留学して洋学伝習を飛躍に導いた人物である。

森鷗外は西周の遠縁の親戚である。西周の父親である西時義は森家の出身である。幼名は森覚馬という森家の次男であったが、西家に養子に入った人である。一方、鷗外こと森林太郎の祖父母は森家に跡取りが居なくなった段階で森家に両養子に入った人たちである。

森林太郎は子供の時にドイツ語学校の寄宿舎に入居する前に一時西周の家に住み込んでいたことがある。津和野町の蔵する『性法略』⁽²⁾の一本に朱筆の書き込みがなされているが、これは西周が森林太郎に買い与えた一本であって、幼い林太郎の質問に西が直接答えた解答の記録であると推計される。『性法略』は森林太郎に人間の性に対する関心と呼び覚ますことになった貴重な書物であるらしいのである。

こうした縁があって西の没後、森鷗外が残された文書を材料に『西周伝』を執筆する運びとなった。

『西周伝』は読みにくい書物である。無味乾燥な

履歴記事が連なり、日譜の体裁に記事が並んでいるところが多く、どこを読んでも予備知識を欠いているため意味が通らないからである。また西の私記や書簡の類を引いているところも多いが古文や漢文がそのまま引かれていて、読者に対して冷淡な叙述に止まっている。こうした中でも西が和文で綴った文章を鷗外が引いているところは他の箇所と比べて描写が具体的であり、日常的でもあって分かり易いので、そこに的を絞って鷗外の紹介と西の原文の違いを対照して見ることにする。

原文と作文の対照を介して鷗外の資料操作の実態が判明し、解釈の当否もまた浮かび上がってくる。西周文書を分析する貴重な手掛かりが見つかることもまた良くあることである。

和蘭留学の経緯について「周当時の事を記して曰く」⁽³⁾と鷗外は付け加える。

「五月安政六年に調所教授手伝たるべき仰をば蒙りにき。此時同じ仰蒙りける中に彼行彦ぞありける。この人は美作国津山の人なりけるが、余と同庚にて、学びの道にはいと深く、蟹文字の学のみかは、漢学倭学にも深かりし程に、花眺むる朝、月見る夕ごとに、いと深くぞ睦び交らひける。その頃行彦も余も、未だ妻さだめせず、定れる宿もあらねば、偕に調所の長屋に住みて、文読みけり。」「余等二人の留学生たらんと思ひ起こし、は、我国と亞米利加合

(1) 明治31年刊。岩波版鷗外全集第三卷所収。

(2) 明治4年刊。西周全集第一巻、宗高書房、所収。

(3) 西周伝、72頁

衆国との間に条約定められて、彼国へ御使遣さるゝことゝなり、水野筑後守、名は忠徳 永井玄蕃頭、尚志 津田近江守、正路 の三人その御使の仰蒙りし時なりき。行彦はそのかみ玄蕃頭の子某に洋書を授けつることありて、玄蕃頭に名を知られ、余も神奈川にて翻訳の事勤めける時一面の識あれば、相議りて此事頼み聞えばやと、玄蕃頭の宅に至りて謁せんと乞ひぬ。玄蕃頭たゞちに延き見て、外の辞は無くて徑ちに、足下等は亞米利加へ往かんとて来ぬるやといふ。現にその願にこそと請ふに、好きなやうに計らふべしとて暇を與へられぬ。然るを其後廟堂に事ありて、世の様さへ遽に變りにければ、彼三人の外国に遣はすことは罷みて、御使ひは別人 新見豊前守正興、村垣淡路守範正、小栗豊後守 にぞ仰せ更へられける。斯くてぞ万延元年は暮れたり。」

西周と津田真道は安政四年に蕃書調所の教授（手伝並）出役を命じられた。二人はまだ結婚前であったので、調所の宿舎である長屋暮らしをしていたが、米国へ外交使節団を派遣するという計画が持ち上がった。万延元年のことである。そこで使節に指名された三人のうち津田が面識のあった永井尚志に米国への随行を願い出たところすんなりと願いが認められた。ところが政変があつて、使節の顔ぶれががらりと変り、すべては沙汰止みとなつてしまった。

文久元年になって今度は欧州に使節団を派遣する話が持ち上がったので、使節の一人である竹内安徳に謁して文を差し出したものの、希望者が多いので難しいという答えであつた。そこで蕃書調所から公務として外国に派遣して貰うことを画策して頭取であつた古賀謹一郎に働きかけて、洋学伝習を申し出たものの、渡航人数が限られ、二人は外されてしまった。

殆ど諦めかけていたところ、たまたま軍艦二艘を米国に注文することが決まり、造船技術の伝習生を

派遣する運びとなつた。そこで調所からも洋学の伝習生を送り出すことを図り、浅野次郎八や大久保忠寛の推薦も加わって津田と西の二人は米国に派遣されることによりやく決まつた。

ところが南北戦争が勃発して米国が軍艦の受注を断つて来たため、またも話は頓挫することとなつた。ここで和蘭に軍艦を注文することに方針が変更され、西と津田の二人は洋学伝習生として他の海軍伝習生や医学伝習生と共に和蘭に渡ることに決し、旅費の支給を受けたうえで、文久二年六月十八日に江戸より咸臨丸に乗船してまず長崎に向けて出航している。

途中はしかが流行って一行は下田に停泊ししばらく逗留するはめになった。

つづいて下田逗留記を取り上げる。「周が手記に曰く」⁽⁴⁾と前置きして鷗外は西の一文を引く。

「扱こゝに一つの障こそ出来にけれ。そは初め浦賀にありける時、舟の内に麻疹病める人二人ありしが、そこにふなかゝりせる間に、又一人二人染まり、この港下田に着きて、二十四五日六月の頃となりては、日ごとに三人四人づゝ煩ひて、遂には上も下も病めるもの半を過ぐるやうになりぬ。さればその病人どちは、下田の市のかしこゝに宿求めて、病の床にぞ臥したる。わがともがらも沢を始とし内田を終として、四人この病に罹り、唯々津田、田口の二人と余とのみぞ其殃を免れぬる。そは余等年長ければ、昔釋かりける程に一たび病みつるが故なるべし。下田の市にては先つ頃より此病行はれ、家ごとに枕を駢べて臥し居たりしが、今は早や癒えたるぞ多かる。かゝれば余等も舟にあらんはえうなく、又風吹き荒るゝ日は舟心地さへすなれば、七月五日より陸に宿りぬ。八日同心町といふ処に仮住まいす。騒がしき地とて、文読まんには宜しからず、又読べき文もあらねば、徒に月日を送るこそ心ならぬ。下田より一里ばかりにして、蓮台寺村といふと

(4) 西周伝、76頁

ころあり。温泉あり。余等暇あれば往きてゆあみしつ。」

浦賀で停泊している時に麻疹の感染が広がり出し、下田に入港した頃には半数は感染してしまい、下田でしばらく療養することとなった。西と津田は年長で子供の時分に既にはしかに罹ったことがあり平気だったので、下田の辺りを見て回ることにした。蓮台寺の温泉やら石廊崎やら下賀茂の温泉やらを訪ねて歌を詠み漢詩を作っている。嵐に遭い雨に降り籠められた折には西はヒロソヒの講義まで試みている。

咸臨丸で長崎に向かい、蘭商船カリップス号に乗り換え和蘭を目指したが、ジャワ沖で座礁し、かうじてバタビアで別の商船であるテルナーテ号に乗り継ぐという事の多い船旅であった。

テルナーテ号の航路記事が続いて日誌の体に並べて見る。文久二年のことである。

(十一月二日) 蘭船 Ternate 号に乗る。船長さ二十間許、幅五六間、広潤 Kallippus 号に倍す。士官各々一房に居る。船長某は Rotterdam の人なり。医一人商二人ありて同じく航す。皆蘭人なり。

(三日) 抜錨す。同方会報告第六号と合わせ看るべし。船 Sunda 海峡を出で、西す。

(連日) 事無し。周蘭語を(内田)正章に授け、正章は算術を周に授く。

(三年元旦) 千八百六十三年二月十八日 船 Greenwich 東経四十度五十度の間、南緯二十度三十度の間にあり。既にして Madagascar の外を過ぎ、喜望峰に沿ひて、西の方 Atlantic 洋に入る。周又微恙あり。蘭医の薬を服して治したり。

(正月中旬) 三月上旬 船嚮を転じて西北を指し、恒信風に乗じて駛す。

(二月八日) 午前六時 St. Helena 島を望む。十一時 Jamestown 港に投錨す。港吏、港医及潁衣婆等船に來たり 午後一時周等上陸して Storer's Hotel に投ず。

市街の人家数百に充たず。然れども官衙あり、学校

あり、病院寺院あり。大街一條巖壁の間を通ずるもの、所謂 Main Street なり。岐して三となる。皆阪路にして山頂に通ず。その左なるものを Longwood に至る道とす。即ち Napoleon I の故居なり。山上所々砲台を起す。兵備頗る嚴なり。

(九日) 周等蘭人一人と俱に、馬車三輛を雇ひて Longwood に赴く。道山腹に沿ひて迂回して登る。嶺にいたれば平夷なり。行くこと里許にして故墓あり。Napoleon の歿するや、一たび其遺骸をこゝに瘞め、後これを巴里なる Dome des Invalides に遷し、なり。又行くこと二十丁許にして故居を得たり。凡そ七房。曰前房、曰居室、曰三将官伺候の処、曰撞球戯の室、曰食堂、曰僮僕の房、曰庖厨是なり。居室の前、撞球戯の室と食堂の間に小砌あり。昔花卉を植うゑし処なり。背後は平野にして又一小屋を望む。云ふ是後に営む所の謫居なるが、未だこれを落するに及ばずして Napoleon 歿せりと。(注記ハ省略ス)

(十日) 船に返る。此より航路北西を指す。

(某日) Ascension に泊す。周等郷書をこゝに留む。

(三月二十二日) 五月九日欧羅巴の外海に入る。漸く冷なり。

(二十七日) 舟嚮稍、東に偏す。

(三十日) 日食あり。

(四月七日) 英の商船 Fortitude 亞弗利加西岸より反る。途に風に阻げられて留まること百余日。初四十日にして郷国に達することを期せしが為に、糧水共に竭きたり。周等が乗る所の船に近づいて救を乞ふ。乃ち糧水を分ちて去らしむ。

(十日) 晚 Cornwallis の岸を望む。初夜燈台を見る。(Eddystone)

(十一日) Channel に入る。船舶の來往漸く繁し。小舟の魚を売るあり。

(十二日) 午後濃霧あり。鐘を鳴して進む。半夜 Beachyhead の燈台を望む。霧漸く霽る。

(十三日) 朝 Hastings を望む。引水人船に來れ

り。午後七時 Dover 海峡を過ぐ。

(十五日) 六月二日月蝕あり。

(十六日) 午前四時 Meuse 河口に至る。汽船来りて本船を曳く。午後八時 Brouwers Lagen に着す。⁽⁵⁾

文久三年五月十七日にテルナーテ号は無事ロッテルダムに到着した。この日ライデン大学の日本語教師であったホフマンがわざわざ船まで一行を出迎えに訪れている。

2. 自叙伝の全文公開

大久保利謙の編集により『西周全集』が発刊され、西周の残した数々の文書が原文のまま公開される運びとなった。その結果、鷗外は引用する際に文飾を加えている様子が明らかとなった。以下に西の書き残した原文を引用して、鷗外の文飾振りを確認して見たい。

まず和蘭留学のいきさつから始める。(鷗外の引いた箇所より少し前から引用する)。

「余が家は代々亀井の家に仕へ来りけるが、余年廿五(嘉永六年)のあき江戸の藩邸に役を祇して来り、廿六のはるおもふ旨ありて暇を取らす一封の上書を留めおきて邸を退きければ其咎とて永く暇をぞ賜りける、此時より彼和蘭陀の文読むことを学びけるか、後また師とたのミし手塚の大人の英吉利の文読むことを学へと勧めしに／＼其文読むことをも困ミてほど／＼読得ることとなりしに、其頃しも蕃書調所といへる西の国の文読む館を開かしけりしに、未タ英吉利の文読む人はなきよしにて、余はいと此学の晩進にハあれと時の頭取の役に任へられし古賀殿より勧められしに／＼(安政四年)五月に調所教授出役といへる仰蒙りにき、」⁽⁶⁾

「此時同しく仰蒙りしなにかの行彦そありける、此人は作州津山の士なりけるか、余と歳を同くし学の道にはいと敏くして、蟹文字の道のミならず漢学

倭学にも深きほとに、彼の花眺むる朝、酒酌む夕毎にいと睦ひ交にけり、さるに此頃しも二人とも未タ妻こもりせすて、なを定れる宿しなければ、調所の長屋に窓を同しくして文読むをそなしにける」

西家は代々亀井家の主治医であるが、西周は廿六歳の歳に浪人を志願し藩邸を脱走した咎として藩を追われたが、まず蘭学に取り組み手塚律蔵の又新堂の書生となった時に師の勧めに従い英学の道に進んだところ、新設された蕃書調所の英学担当の教員に拔擢された。この頃津田真道(当時行彦)も蘭英兼学の教員として採用され調所の長屋での暮らしが始まっている。

続いて下田逗留記から引用する。

「さてこゝにてひとつのさわりいてきて、けふかひまでふなでせぬこととはなりけり、そははじめ浦賀にありにけるとき、ふねにはしかやミのひとりふたりありけるか、そこにふなかゝりせしまに、またひとりふたりそミ、このミなとへつきて、四五日のころには、ひに／＼三人も四人もつたへ、ついにのりくみしひとかミしもともなかはすきもミなやミつきけるにぞ、ミな下田のかしこゝにやととりて、やまひのゆかにぞふしたり、わかともからのうちにても、沢をはしめとし、内田ををわりとし、四人ともにそミ、たゝわれら三人のミはとしもたけぬるゆへ、いとけなかりしときにややミけんこたひはそまず、また下田はさきつころよりこのやミおこなはれ、家に戸にやミふしいたりしか、けふしはまつやミはたせるものそおほかる、かゝりければ、おのれらもふねにいなもいたつらにて、かつはおりにふれ、なミあらきときにはふなこゝちもするものから、くかあかりしてやとかりてすミぬ、されとものさわかしきところなれハ、まなひわさなとらんもこよなく、かつはよミなんふミとともなけれハ、いたつらにすくるそこゝろならてくるし、しもたのちかきほとり一里はかりに、れんたいじむらといへる

(5) 西周伝、82～84頁。

(6) 西周全集第三巻、340頁

あり、こゝにはわきいつるゆおほし、またやまのあ
なたこなたにもあるよしなり、ことなきをりから
に、ひとひかけてゆあひにとてゆきしこともたひ
／＼なり。⁽⁷⁾」

西の文章は基本は和文である。漢字の使用は固有
名と数詞にはば限られている。「三人」「四人」には
「ミタリ」「ヨタリ」とカタカナを用いて読み仮名が
振ってある。数詞の表記は漢字であるが、読み方は
和語そのものである。ところで鷗外が西の和文を独
自の雅文に書き上げ書き直していることは明白であ
る。仮名遣いと漢字遣いに妙味が示されている。西
は蕃書調所の宿舎で津田真道（当時は行彦）という
和学者と暮らしていたので、和文にははるかに深入
りしていて、仮名文を普通に書く習慣を身につけて
いたことがここから判明する。鷗外の和文は雅文で
あるが、基本は漢字仮名交じり文である。

更にテルナーテ号の航路記事を引用する。⁽⁸⁾

バタビアヨリオランダニ帰航スルノ船ヲ Ternate
トイフ。大キサカリプスニ倍セリ。長サ二十間バカ
リ広サ五六間バカリ士官ハ各々一船房ヲ有ス。蘭医
一人、蘭商二人、帰国スル者ト共ニス。船長名ハ
(空白)、オランダ、ロツトルダムノ人ナリ。(余
白)。起錨。コレヨリジャワ島ノ西端ニ至リ、スマ
タラトジャワトノ間ナルシュンダ海峡ヲ越エ、ヨウ
ヤク南シテ赤道下ヲ過ギ、再ヒ貿易風ノ域ニ入ル。
船内無聊、四望タダ蒼海渺茫タルノミ。日ニ書ヲ読
ミ、博戯ヲナスノ外他無シ。余、内田氏ニ從ヒ洋算
法ヲ講ジ、内田氏、余ニ從ヒ文典ヲ受ク。交互ニ相
師トス。余、数学ニ於テ算術ヲ畢ハリ、代数程式ニ
及ブ。後コレヲ果タサズ。

文久三年癸亥 歳三十五歳。歳ヲカリップス船中
ニ迎フ。此ノ時船グリニッチ東経ノ四、五十度間、

南緯二、三十度間ニアリテ、アフリカ東岸ナルマダ
ガスカル島ノ洋中ニ在リ。同行田口君狂句アリ。云
フ「マダ借スト聴キテ嬉シキ歳ノ暮」赤松君ソノ下
ヲ属シ、「パッサト過ギテボイト乗り込メ」蓋シ
パッサートハ貿易風ノ蘭語、ボイハ熱帯下驟雨風起
ルノ蘭語。是ヨリ船、希望角ニ沿ヒテアトランチック
海ニ入ル。蓋シ欧州ヨリ東シテインド洋ニ出ル者
ハ、希望岬ニ着キ、而ウシテ東スルヲ常トス。此ヲ
過ギ西スル者ハ直チニヘレナニ駛スルヲ常トスト云
フ。故ニ船直チニセント・ヘレナ島ヲ指ス。希望峰
ニ至ラズ。極メテ憾ミトス。希望峰、アフリカノ南
端。船喜望峰ヲ過ル比ホヒニ船中ニテ余再ヒ不快ナ
リ、体シタル事ニ非ラス、船医ニ就テ薬ヲ乞、数日
ニシテ癒ユ。然レドモ山峰アルノ謂ヒニアラズ。
船、今、港ヲ距ルコト蓋シ数十里ノ外洋ニアリ。故
ニ其片影ダモ望ムコトアタハズ、失望ニ属スルナ
リ。然レドモ此ノ辺洋面ノ水色、黄ヲ帯ブルコト、
猶支那沿海ノ如シ。依リテ陸地ノ遠カラザルヲ知ル
ナリ。此ノ事蓋シ此年正月ノ中旬ニ在リ。是ヨリ船
行転ジテ西北ヲ指シ、恒信風ニ乗ジテ日ニ駛シ、ロ
フノ測量五、六里ニ出入ス。

二月八日ニ至リ、午前六時、前面ニ島與ヲ発見
ス。之ヲセント・ヘレナトイフ。此ノ島、南アトラ
ンチック海中南緯十五度五十五分二十六秒、グリ
ニッチ西経五度四十二分三十秒ニアリテ尚東南恒信
風ノ域ヲ離レズ。バタビア起錨以来概ネ三ヶ月ニ渉
ル。船客倦ム甚ダシ。此ヲ聴キテ喜ブコト甚ダシ。
十一時、ゼームスタウン港三町バカリノ処ニ下碇
ス。既ニシテ港吏並ビニ檢疫医・洗婆ヲ来タル。我
ガ一行、午後一時バカリ船ヲ買ヒ、ゼームス街ニ上
陸シテ旅亭ニ頓ス。蓋シ此ノ島初メ葡人ノ拠ル処ト
ス。後オランダ之ヲ奪ヒ、後マタ英ニ転ジ、現ニ英
ノ所属タリ。島甚ダ広カラズ。周囲六里バカリニシ

(7) 西周全集第三卷、348～349頁

(8) 西周全集第三卷、748～753頁。文中漢字書きの国名や地名はカタカナで表記した。また行間に書き込まれた次の指示即ち「茲ニ次ノ段ヲ挿入ス」や「此所」「アッセンシユンノ條ヲ加フベシ」に従い、文章の順序を一部変更した。

テ、東北東ヨリ西南西ニ偏長ナリ。殊ニ南アトランチック海ニ孤立スルヲ以テ、商船往来ノ必ズ寄ル処トス。故ニ名著ハル。ゼームスタウン、山間ノ壑ノ少シク平ラカナルモノ、港ニ背シテ行クコト数町間、街ヲ開ク。之ヲメーン・ストリートトイフ。ソノ余ハ山崖ニ沿ヒ家ヲナス。人家蓋シ百ニ満タズ。然レドモ港吏アリ、学校アリ、寺院・病院アリ、武備アリ、万欠クルナシ。其港ニ面スルノ側面ハ砲台ヲ起コシ、巨砲ヲ列ス。亦厳ナリトイフベシ。メーン・ストリート尽クル処、路岐シテ三トナル。是皆山頂ニ通ズルノ路ナリ。其ノ一。港ニ面シ左後ニアルモノライハユルロングウッドニ至ルノ路トス。ロングウッドハナポレオン第一世ノ此島ニ竄セラルルヤ、其棲息シタリシ処トス。

我ガ一行、次日〔欄外——西暦二月二十七日〕ノ朝ヲ以テ発シ、其地ヲ訪フ。

皆馬車ニ乗ル。一行十二人。オランダ人ヲ合セテ十三人バカリ。三輦ノ馬車ヲ雇フ。其路、山腹ニ沿イ、羊腸ナリ。暫ラクシテ登ルコト極マリ、乃チ山頂ノ平地ナリ。行クコト里バカリ、帝ノ墓所アリ。然レドモ是既ニ一八四一年十月十五日ニ此地ヨリ其遺骸ヲバリニ還葬シタルノ遺跡ナリトス。我ガ一行、之ヲ觀、オヨソ二十町バカリニシテ帝ノ棲息ノ処ニ至ル。即チロングウッドナリ。其ノ故居猶存セリ。前庁アリ、帝ノ居室アリ、将官三人ノ居所アリ、玉突戯ノ室アリ、食堂アリ、僮僕ノ室アリ、庖厨アリ、スベテ七室、帝ノ居室ノ前面ニアタリ食堂ト玉突戯ノ室トノ間ニ砌リアリ。草花ヲ植エテ鬱ヲ慰セシ所ナリトイフ。其ノ背面平野ニシテ、距ルコト幾クモ無ク亦一小家ヲ觀ル。是帝ノ新居ナリト云フ。曰ハク帝、コノ新居ヲ營シ、未ダソノ功ヲ竣ズシテ崩ゼリト。是ヲ一見シテ帰路ニツク。
(中略)。

土人喜ンデ小鸚鵡ヲ飼フ。其ノ羽ノ美ナルヲ以テナリ。蓋シ此レアフリカノ西岸ヨリ此ノ地方ヲ通ジ、此ノ鳥多ク産スト云フ。亦一小鳥ナポレオント称スルモノ、此ノ島ニ産スル故ニ名付ケタリト見ユ。此

ノ邦ノ菊頂トイフ鳥ノ如シ。羽毛麗、形極メテ小、愛スベシ。余、児童ノ之ヲ売ル者ニ就テ二、三隻ヲ買ヒ、之ヲ船ニ齎シタリ。然レドモ地帯ノ温度トミニ変ズルヲ以テ、数日ニシテ死シタリ。余ガ輩ハ島中ニアルニ泊、十日朝、テルナーテ号ニ帰リ（以下余白）

是ヨリ聖都アツセンシユン嶋〔昇天島ト訳ス。此ノ日ニ発見シタルニヨル〕ニ一寸立寄りタリ、嶋ハ喜望峰ヨリ南東千二百五十里キロメートル、聖厄列那マデ東南千二百キロメートルノ處ニアリ、茲ニ英吉利ノ郵便署アリ、故ニ郷書を發スル為ニ立寄りタルナリ、

聖都厄列那ヲ去ル時スラフ船ノ事アリ、是其日頃亞弗利加陸地ニ近ク英ノ軍艦ニ捕レタル者ニ第二層ニ五百五拾人ノ賣奴ヲ拘置シ、士官二人、水夫五人ニテ之ヲ監守セリト云フ、此日ヨリ先厄列那ノ海岸ニテ其賣奴船ヲ焼キ捨テタリト云フ、英国ノ威且仁ナルコト知ルベシ

西周の自叙伝の記述はセントヘレナ島訪問に続くアセンションの条で中断している。ところが鷗外はおかまい無しに航海の記録を書き進んでいる。鷗外が典拠とした資料は何か。それは「航海記」である。

3。「航海記」とは何か

自叙伝のうち和蘭行きの船旅の記録はセントヘレナ島を訪問した記事の直ぐ後のところで中断しているが、鷗外は航海記の続きを順調に書き綴っている。

鷗外には「航海記」と呼ぶ別の資料があったからである。

「航海記」とはなにか。鷗外は『西周伝』の凡例において参照文献として「和蘭紀行」の次に「航海記」をあげている。「和蘭紀行」には「文久二年發江戸至長崎」と注がついているし、また「航海

記」には「文久三年 航大西洋至和蘭」という注が付いている。

大久保利謙はこう記している。

『西周伝』を見ると、長崎からオランダ商船 Kallippus 号に投じて翌年オランダに到着するまでの詳しい記事があるが、これは大部分「西家譜略」を稿本としている。しかしこの「西家譜略」もセントヘレナ島でナポレオン一世に遺跡を訪うたところで筆をたち、オランダ到着には及んでいない。そこでセントヘレナ島以後の原拠はべつにあるのか、ということになる。ところが、西文書中の「云何惟人」という稿本のなかに「和蘭行日記ノ内」と表題のある断片がある。内容はきはめて簡単な航海中の日程表のようなものでけっしてこれは「航海記」といえるようなまとまったものではないが、内容を検すると明らかに『西周伝』の材料らしいので、したがってこれが前記の「航海記」のことらしいと断定しておく。また表紙に鷗外が「採録了」と記入しているのも一つの証拠となろう。⁽⁹⁾

『西家譜略』とは西周の自叙伝のことであるが、問題は西周がいつ頃にこの航海の日程表を書いたのかということになる。「算法」と「云何惟人」という稿本の間の余白に書き込まれたと推定されるこの断片を西が書いたのはいつ頃のことか。またこの航海日記の作者はだれなのか。西周本人が書いた日記なのか。それとも別の誰かが書いた日記を西が後年に書写したものなのか。もし書写したとすれば、それはいつ頃のことか。新しい問題が登場する。

「航海記」の内容に点検を加えておく。⁽¹⁰⁾

文久三年三月九日の記事で始まる。（三月八日の記事は追記である）。

気象や航路に関する記事が目立つ。これは海軍伝習生の書いた航海日記である。上欄に小さな数字が書き込まれている。たとえば三月九日の記事の上欄

にはまず「アフリル廿六日」と洋暦の日付が付されているが、その上に「北二十二 西三十七・二十五」と小字で記入されている。これは船の位置を示す測定値の記録である。北緯22度西経37度25分を示す書き込みである。この日テルナーテ号が大西洋のまっただ中を航海していたことを示す書き込みである。また洋暦「六月三日」の記事に「内田氏」と見え、内田恒次郎の日記ではないことが分かる。とすればこれは赤松大三郎が書いた航海日記であろう。榎本武揚には別に『渡蘭日記』⁽¹¹⁾があるし、沢太郎左衛門の日記も別にある。

この日記断片は西が書写したものである。墨書、自筆である。三月二十七日の記事に「此日午則北緯五十四度」とあるが、これは四十五度の写し間違いである。上欄の数字には四十五、十八分と見える。おそらく日記の原文は縦書きで書かれていたが、緯度の数字だけが「四十五」と横書きに書き込まれていたのをうっかり右側から読んで誤読に落ち込んだ結果であろう。こうした誤写は書写の際に生じやすい間違いであるから、この断片が書写されたものであることは確実である。

とすれば西がこの「航海記」を書写した時点はいつのことであろうか。

4. 自叙伝の成立時点

ところで自叙伝の起稿はそもそもいつのことであろうか。明記はないが、榎本武揚について「後和泉守今通信大臣」と注がある。榎本が通信大臣に就任したのは明治十八年十二月のことである。また津田真一郎について「今議官真道」と注がある。津田真道は西周と長く元老院の議官として同僚であった。

西の明治十八年及び十九年日記を検すると次の記事が見える。

「従事紀行」（18・2・24）「聖厄列那ノ条ヲ書き

(9) 西周全集第三巻、解説73～74頁。

(10) 西周文書十一、国立国会図書館、憲政資料室蔵。

(11) 『榎本武揚シベリア日記』（講談社学術文庫1877）2008年。所収。

了ル」(18・3・5)「赤松ヲ訪フ、日記ヲ返ス」
(18・3・8)

「従事履歴之事筆記」(18・9・27)「履歴ニ従事
ス」(9・30)「従事履歴」(10・10)

「履歴譜ヲ認ム」(19・10・24)「履歴少々草ス」
(10・25)「少履歴ヲ記載ス戊辰正月末ニ至ル」
(12・22)

こうして見れば、自叙伝のうち始めに書かれたの
は、聖ヘレナ島までの船旅の様子を描いた和蘭行き
紀行の部分であった事が分かる。「赤松ヲ訪フ、日
記ヲ返ス」とあるが、西は赤松が大事に保管してい
た洋風日記帳を借出してそれを丹念に写し取って
「和蘭紀行追加」を書き上げ、この日に返却したこ
とが分かる。

おそらくは聖都ヘレナの条を書き上げた3月5日
から3月7日にかけて赤松の洋風日記を丹念に書写
したものであろう。

西の自叙伝は次の三つの部分に分けて見ることが
出来る。

(い) 森家譜略から藩邸脱走まで及び安政年間の記事

明治18・9・27/30。同10・10に執筆したと推定
される。

家譜略履歴旧記が原の資料である。あとは記憶に
基づく記事である。

(ろ) 和蘭行きの経緯と咸臨丸、カリップス号及びテ
ルナーテ号の船旅の記事

明治18・2・24から同3・5にかけて執筆したと
推定される。

「和蘭行ノ古書」が原の資料である。あとは記憶

に頼って書かれている。

(は) 五科口訣紀略及び元治慶応年間の記事

明治19・10・24~26/30。同12・22に執筆したと
推定される。自序訳五科口訣総□法、日記断片及び
西升子日記手控えを原の資料とする。あとは記憶に
基づく。西の記憶は思いのほか驚くほど正確であ
る。⁽¹²⁾

こうして見れば、西が赤松から借りた洋風日記帳
の記事を写し取った時点は明治十八年三月五日から
三月七日にかけての三日間であったと推計される。⁽¹³⁾

5. 航海記の点検

まず航海日記のはじめの部分(point)を点検する。三月
八日の記事は余白に書き込まれた記事を拾った追記
の模様である。文久三年。西暦では1863年に当た
る。

(三月八日) 今朝より風の力微なり

向はかわらす 晴

十字星猶見ゆ 再びス

チルテニ入る

アフリル廿六日 (九日) 晴 風無し 夜ボイ来
り船進む 既して止む

廿七日 (十日) 晴 午後風出ツ船進ム
冷氣催ス

廿八日 (十一日) 晴 風

廿九 (十二日) 晴 風ナシ 罪隸

三十 (十三日) 晴 暮雨忽止風甚微ナ
リ 此両三日神馬草頻
流来中有魚兒

(12) 尤もセントヘレナ島に於ける一行の動静については赤松大三元の「シントヘレナ滞在中日記」をも参照している模様である。「赤松大三元年譜抄」の書き入れ参照。『幕末和蘭留学関係史料集成』大久保利謙編、雄松堂書店、472頁。

(13) 因に西周が赤松大三元のもとを訪ねて借りていた日記を返した明治18年3月8日の時分に森林太郎はどこで何をしていたのか。「来責府」ライブチッヒにおいて医学研修に当たっていた。『独逸日記』から前後の記事を引いて置く。

「三月三日。大学冬期の講畢りて講堂を鎖す。業房は鎖すことなし。

七日。ホフマン師の姑ウンデルリヒ Wunderlich 氏の柩を送る。

九日。家書到る。」(鷗外全集第35巻92頁)。

(14) 西周全集第三巻、783頁

メイ 一 （十四日）晴、雲あり終日有風
弱力漸船進
二 （十五日）陰 時々雨来ル終日有
風船進而不止 夕船ノ
前面蒸気船一艘ヲ見ル
（以下省略）

三月九日の上段の欄外に「アフリル廿六日」と書かれ更にその上段に「北二十二」「西三十七・二十五」と小さな漢数字が二行に並べて書き込まれている。以下「メイ二十一」まで二行の数字が並んでいる。北緯二十二度、西経三十七度二十五分という緯度と経度を示す数字の書き込みである。⁽¹⁵⁾

この航海記の記事はなぜ文久三年の三月九日の記事から始まっているのか。これは赤松大三郎の洋風日記帳の記事が1863年の4月26日の記事から始まっていたからと推定される。もしそれよりも前の記事が書いてあったとすれば、西はその記事を書写したに違いないからである。この日記帳はおそらくはAprilから始まっていて四月分の日記欄のうち二十五日までのところは空欄となっていたと推計される。西はアセンション島に立ち寄った月日を確認めようとして赤松の日記を借りたと推察されるので何か記事があれば写し取らない筈がないからである。ところがその辺りの記事はなく日記帳には空欄が広がっていたのであろうと推察される。（空欄中に三月八日の記事が追記の形で書き込まれていたのに後で気付いてこの記事から写し始めたときにまず九と書いた日付の文字を八に書き換えたと推計される）。

仕方がないので西は附箋を取り出し質問事項をメモに書いて、日記を返す際に赤松に直接確かめて聞き取りを行った模様である。

『西周伝』の記事と対照するために該当箇所の記事を抄しておく。

（三月二十二日）晴終日好風船進而不止至子夜駛八

里 此日正午所測既入欧海
（二十七日）半晴船一時至十二里午後濤殊高船
震揺甚此日午測北緯五十四度船転偏東来
（晦日）日食朝来風落船進緩有陰霧五時日蝕
右上缺三分朝霧来 緑維曆夕五時 五時十六分過
二見る

（四月七日）朝来風少穩 晴晚風少 ○英商自亞
弗利加西岸而帰者中途無風船（——スラーフノ話）
不得進為之所阻至百日尋当四十日程能所達云是以船
内糧水夫尽乞助至此船得諸品而云地名ヲロス船ホ
ルチヲネト [Fortunateナルベシー筆者注]

（十日）晴朝船三十許見於前後 午後 風至
晚遙望英コルワル至初夜望見火標塔

（十一日）晴風微淡日如春朝望見英国地方船十
数艘相前後買魚蒸気船過既入カ子ル

（十二日）曇午後霧降甚船来るときに鐘を打つ
甚し緑燈赤燈のきめを聞く 子夜見ビッチヘッド
Bichhead の火夜半霧頗ル晴る

（十三日）曇朝起見蒸気船於船窓、又出甲板上
右見一蒸気船曳フレガット而過峽左望ハスチンス
Hastings 午前引水人來入船、夕七牌過ドーフル峽
晚来細雨右見仏山開レウサッチ不見船客十八人初夜
アレイス（仏）の火ヲ見

（十五日）曇晚来晴風尚逆船ツエンデンス十時
頃月蝕三分一エストカヘルの火を見る。

（十六日）晴七時頃マーストグウレーの口に
至る蒸気船八十馬力位是を引く晚港司來旅客二人去
夜飲岬酒賀甲比丹ホフマン書至内田氏此日天氣好晴
雖風寒快甚堤上家人見右臂短左臂長。

鷗外の関心がアセンション島への寄港や大西洋の
航海には向かっておらず、ヨーロッパへの旅路に偏
していることは明らかである。「某日 Ascension に
泊す。周等郵書をここに留む」。月日不詳といった
細部に踏み込むことを回避する巧みな記述である。

(15) 全集ではなぜか欄外上段に書き込まれたこの数字が印刷されずに省略されている。西周全集第三巻494頁以下参照。

6. 問題の所在

テルナーテ号は聖都ヘレナ島を出航したのちにどこかの島に立ち寄ったのか。

西の自叙伝によれば、アセンション島に立ち寄ったとある。

「是ヨリ聖都アツセンシユン嶋ニ一寸立寄りタリ、嶋ハ喜望峰ヨリ南東千二百五十里キロメートル、聖厄列那マデ東南千二百キロメートルノ處ニアリ、茲ニ英吉利ノ郵便署アリ、故ニ郷書を發スル為ニ立寄りタルナリ」

この記事には意味の不明な所がある。意味不明なのは次の箇所である。「嶋ハ」「喜望峰ヨリ南東千二百五十」とあるが、明らかに方角が間違っているとしか読み様がない。

なぜこうなるのか。

それは附箋の書き込みをそのまま再現しているからである。

附箋には「(喜望峰)」「ヨリ南東千◆五十キロメートル」とある。ここは「喜望峰ハ聖厄列那」「ヨリ南東千◆五十キロメートル」という意味の箇所である。聞き書きが不十分であってこうした意味不明の文章が成立した。ここを修正すれば、本文はこう変る。

「嶋ハ」「喜望峰マデ南東千◆五十キロメートルノ處ニアル」「聖厄列那マデ東南千二百里ノ處ニアリ」あるいは

「嶋ハ」「喜望峰ヨリ北西千◆五十キロメートルノ處ニアル」「聖厄列那マデ東南千二百里ノ處ニアリ」かくて本文はこう訂正される。

「嶋ハ」「喜望峰ヨリ北西千◆五十里/キロメートル」の所にある「聖厄列那マデ東南千二百里ノ處ニアリ」

この島はアセンション島ではありえない。西は思い違えをしているのである。アセンション島とは別の島をアセンション島であると思い込んでいたのである。

附箋に書き足された聞き書きによれば、聖都ヘレナから喜望峰までの距離は千五十里であるが、聖都ヘレナからこの島までの距離は千二百里である。単位を里として換算すれば、聖ヘレナ島からこの島までの距離は約五千キロメートルに当るし、聖ヘレナ島から喜望峰までの距離は約四千二百キロメートルとなる。目分量で数字がはじき出されていて実測値より大ざっぱ数字になっているのかも知れない。

ところがこうした謎は鷗外の巧みな文章力によって隠され封印されてしまう。「此より航路西北を指す。某日 Ascension に泊す。周等郵書をここに留む。」月日不詳をあっさりと「某日」と纏め上げる。鷗外の筆力は際立っている。西周の記憶力に鷗外は全幅の信頼をおいているからである。「東南」を「西北」にさり気なく書き換えているところが流石である。鷗外はテルナーテ号がアセンション島に立ち寄ったことは確実であるが、その月日が不詳になってしまったと解している。

だが問題が残る。鷗外の解釈は的を射たものであったのだろうか。それともアセンション島に立ち寄ったこともまた不詳であるという別の解釈も成り立ち得るのであろうか。この点を確かめるためにアセンション条の成立した事情を解き明かす試みに挑戦しよう。

7. アセンション条の成立事情

本文と附箋のメモ書きを対照して本文の成立する有様を窺って見よう。

(本文)

船喜望峰ヲ過ル比ホヒニ船中ニテ余再ヒ不快ナリ、体シタル事ニ非ラス、船医ニ就テ藥ヲ乞、数日ニシテ癒ユ、

是ヨリ聖都アツセンシユン嶋ニ一寸立寄りタリ、嶋ハ喜望峰ヨリ南東千二百五十里キロメートル、聖厄列那マデ東南千二百キロメートルノ處ニアリ、茲ニ英吉利ノ郵便署アリ、故ニ郷書を發スル為ニ立寄りタルナリ、

聖都厄列那ヲ去ル時スラフ船ノ事アリ、是其日頃
亞弗利加陸地ニ近ク英ノ軍艦ニ捕レタル者ニ第二層
ニ五百五拾人ノ賣奴ヲ拘置シ、士官二人、水夫五人
ニテ之ヲ監守セリト云フ、此日ヨリ先厄列那ノ海岸
ニテ其賣奴船ヲ焼キ捨テタリト云フ、英国ノ威且仁
ナルコト知ルベシ

（附箋）

是ヨリアツセンシユンヘ月日不詳

喜望峰ヲ通る比船中ニ而病氣之事

聖厄列那之事スラフ船之事

第二層ニ五百五拾人ノスラフ

士官貳人水夫五人

是ヨリ先船ヲ海岸ニテ焼キ棄テタリ

元日馬太加斯加爾沖ヲ過ギ

二月九日聖都厄列那那勃崙一世ノ墓ニ到る

（附箋への聞き書きの「書き込み」）

「家書認之事」

是ヨリアツセンシユンヘ月日不詳

「ヨリ千◆五十キロメートル」「南東」

喜望峰ヲ通る比船中ニ而病氣之事

「ヨリ北東千二百里」「火山ノ巖崖ナリ ascension」

聖厄列那之事スラフ船之事

西が附箋のメモ書きをもとに本文を書き綴っていることは見やすい。「喜望峰ヲ通る比船中ニ而病氣之事」という附箋のメモをもとに記憶を呼び覚まして本文上段の記事を書いていることが判明する。「船喜望峰ヲ過ル比ホヒニ船中ニテ余再ヒ不快ナリ、体シタル事ニ非ラス、船医ニ就テ薬ヲ乞、数日ニシテ癒ユ」

本文下段の記事も同じ様である。

「聖厄列那之事スラフ船之事／第二層ニ五百五拾人ノスラフ／士官貳人水夫五人／是ヨリ先船ヲ海岸ニテ繩之□タリ」という附箋のメモをもとに本文を書いている事が分かる。

「聖都厄列那ヲ去ル時スラフ船ノ事アリ、是其日頃亞弗利加陸地ニ近ク英ノ軍艦ニ捕レタル者ニ第二層ニ五百五拾人ノ賣奴ヲ拘置シ、士官二人、水夫

五人ニテ之ヲ監守セリト云フ、此日ヨリ先厄列那ノ海岸ニテ其賣奴船ヲ焼キ捨テタリト云フ、英国ノ威且仁ナルコト知ルベシ」

これに対して本文中段のアセンション島に関する記事は主に聞き書きに基づいて書いている事が判明する。「家書認之事」「（喜望峰）ヨリ南東千◆五十キロメートル」「（聖厄列那）ヨリ北東千二百里」といった書き足しの箇所に基づいて西は記事を書き進めている。

「是ヨリ聖都アツセンシユン嶋ニー寸立寄りタリ、嶋ハ喜望峰ヨリ南東千二百五十里キロメートル、聖厄列那マデ東南千二百キロメートルノ處ニアリ、茲ニ英吉利ノ郵便署アリ、故ニ郷書を發スル為ニ立寄りタルナリ」

「千◆五十」が「千二百五十」に変っているし、また「キロメートル」という単位と「里」という単位が入れ替わったり併用されていることが目に付く。西は距離の単位について自信が持てなくなってしまったわけである。

8. 対話の再現

論点を深めるために想像力の力を借りて二人の会話の様子を再現して見よう。

—— 赤松大三郎の家の書斎での出来事である。借りていた日記帳を無事返してほしかったところで西周は持って来た附箋をおもむろに取り出してこう切り出した。

「聖ヘレナを出てもう一つの島に立ち寄っただろう。あの島に立ち寄ったのは何月の何日のことだったか、覚えているか」西周は赤松大三郎に訊ねた。

「日にちまでは覚えていない。お前田舎に手紙を出しただろう。あの手紙の消印を確かめれば、大体のことは分かるのではないか」

「そんな手紙はもう残ってはいなかろう」

「それでは日付までは分からないな」

「あの島から聖ヘレナまでの距離はどの位だ」

「まあ千二百里くらいといったところかな」

「千二百里というが里は海里のことか。」

「違う。里だ。箱根八里の里だ。千二百里は換算すればおよそ五千キロメートルになる」

「聖ヘレナから喜望峰まではどの位の距離だ」

「千五十くらいだろう」

「あの島までは聖ヘレナから喜望峰よりも遠いのか」

「そうなるな」

「そうか……。分かった」

西周は赤松大三郎の返答にどうにも腑に落ちないものを感じていた。どうして赤松の日記には聖ヘレナ島を出航してからあとの事が全く書かれていないのか。日記の欄が空白のままに残されているのか。この空白を見た時には西は狐に摘まれたような気がした。探していた日付のあたりには何の記事も書き込まれていない。日付の手掛かりが丸で煙のように消えてしまったかの如き印象を受けたからである。

家に戻ってから西は赤松から聞き出したことを附箋に聞き書きの形に書き足した。「家書認之事」「(喜望峰) ヨリ千◆五十キロメートル」「南東」「(聖厄列那) ヨリ北東千二百里」。また字書でアセンションを引いて見た。「火山ノ巖崖ナリ ascension」とあった。

数日後に附箋を頼りにアセンション条の起草を開始した。世界地図を見る限りセントヘレナ島とアセンション島の距離は千キロメートルくらいである。千二百里というのは千二百キロメートルの聞き違いに違いない。とすれば千二百五十里と赤松は言ったのだろうか。しかしながらそれでは五千二百キロ

メートルになってしまう。はたして里が単位なのかそれともキロメートルが単位なのか。西は自信を失い、里とキロメートルを入れ替えたり、並べて書いたりすることとした。

あの島は本当にアセンション島だったのだろうか。それともアセンション島とは別のどこかの島に自分は立ち寄ったのだったのだろうか。迷いの果てに西は和蘭紀行の続きを書くことを諦め、筆を絶つ事にした。――

以上想像力の翼をひろげて問題点の掘り下げを試みた。

9. 作業仮設の設定

ここで作業仮設を設定する。即ち、テルナーテ号は聖ヘレナ島を出航したのちにカーボヴェルデ諸島に立ち寄った。

この作業仮設は確証性の高いものである。この仮設によれば切支丹禁制に触れることを恐れた海軍伝習生の一行は一切の記録を残さないように注意深く行動したことが良く説明できるからである。

第一にまず海軍伝習生や洋学伝習生の日記をみても、聖ヘレナ島を出航してからしばらくの間の記事がほとんどないことが目に付く。

榎本武揚の『渡蘭日記』はテルナーテ号の航海記であるが、聖ヘレナ到着の記事までで終わっている。どうして渡蘭日記に聖ヘレナから和蘭に至る部分の航海の記事が洩れているのであろうか。榎本が何かを避けているとしか考えにくい。

沢太郎左衛門の日記には次の記事しかない。⁽¹⁶⁾

(16) 刊本の『渡蘭日記』(講談社学術文庫)に掲載する地図Bにはテルナーテ号の航路が実線と点線で示してあるが、うち聖ヘレナから先の点線の部分に丸印が三カ所に付してあって二月二十一日と二月三十日と三月三日という日付が記入されている。原本の書写と解説にあたった広瀬彦太が沢のメモ書きから拾って割り振った日付であろう。沢のメモはこう復元される。

セントヘレナ島。二月九日着。二月十一日出航。

二月二十一日。(赤道に至る)

二月三十日。(カーボ島沖合に停泊)

三月二日。(カーボ島に寄港)。久しぶりに北極星を見る。

三月三日。(カーボ島出航)

備忘のために日付だけを書いたと推察される箇所の内容を試みに(括弧内)に再現してみた。

セントヘレナ島二月九日着。二月十一日出航。

三月二日。久しぶりに北極星を見る。

第二に赤松大三郎の洋風日記を書写したと推計される「和蘭紀行追加」という航海日記を分析する限り、文久三年三月八日より前の記事は一切記入されてはいなかったと推算される。

赤松大三郎の洋風日記には洋暦の四月一日から二十四日までは何の記事も書き込まれずに日記は空欄となっていたと推計される。もしかか記事があれば西周が書写したに違いないからである。

したがって正式の『航海日記』のこの間の記録は帰路の航海記録を巧みに活用して案出した赤松の創作に出る疑いが濃い。赤松大三郎は日記帳に空白を残すという形を借りて歴史の真実を語っているのである。

第三に西周は聖ヘレナ島を出航してからテルナーテ号がアセンション島に立ち寄ったと書き残している。寄港の月日は未詳とされているが、自叙伝の記載を見渡す限り西の記憶はしっかりしているので、どこかの島に立ち寄ったという西の覚えは確かである。ただし西はその島がアセンション島であると始めから思い込んでいた模様である。

第四に津田真道の日記がある。『はなの志をり』⁽¹⁷⁾と題された津田真道の日記は簡潔である。
(二月) 十一日 朝船出す。

十六日 アスセンション島を左に見る。大さセントヘレナ許、飲水なしといふ。英領にて、英軍艦、此両島間を徘徊して、スラフ売買の船を探討すといふ。

二十三日 赤道を越ゆ。

アセンション島が左側に見えるという。アセンション島には立ち寄っていないということである。飲み水がないという。この話は津田がテルナーテ号の船員から聞き出した話であろう。アセンション島は英国の領土であって、聖ヘレナ島とアセンション島の

間を英国の軍艦が「徘徊」して奴隷売買を行う奴隷船の探索と討伐にあったっているという。これもテルナーテ号の船員から津田が聞き出した話であろう。蘭語と英語を交えたチャンポンな会話が行われた公算が高い。津田は英蘭兼学の学者であった。「飲水がない」というのは、おそらくは奴隷船を拿捕して救出した黒人たちを一時的にアセンション島に受け入れた結果として飲み水の不足が発生したということの様である。西が聞き覚えていた聖ヘレナで聞いた話では奴隷船には550人もの黒人奴隷が詰め込まれていたという。

こうした話をテルナーテ号のオランダ人船員が話すのは、アセンション島に停泊して給水をするという当初の予定が変更になった事情を説明しているものと憶測される。西は英文や蘭文を古典の様に読む読書の人であったから、蘭人との会話には強い興味はなくあまり関わらなかった模様である。

その結果西だけが寄港地が変更になったことを知らずに航海を終えたという結末になった模様である。テルナーテ号はアセンション島には立ち寄っていないのであるから、いくら調べてもその月日が不詳のままに残るのは避け難いことであった。

もしこうした分析が的を射ているとすれば、立ち寄り先はカーボヴェルデ諸島であることにほぼ間違いはない。給水や食料補給のために寄った途中の停泊地はサンディアゴ島ないしはサンヴィンセンテ島のどちらかではあるまいか。西は停泊先の島で多くの黒人の姿を目撃して、セントヘレナ島で焼却された奴隷船から救出された黒人たちがそこにいるのではないかと認識して、アセンション島の記事の後にそれに付け加えるかの様に奴隷船のことを記録したのかも知れない。

かくてテルナーテ号がカーボヴェルデ諸島に立ち寄ったという史実は歴史の闇の中に隠されてしまうのである。

(17) 『幕末和蘭留学関係史料集成』大久保利謙編、雄松堂書店、1982年、所収。525頁。

『西周伝』のうちテルナーテ号の航海記の一部分には次の如き訂正が必要なようである。

二月十一日。聖厄列那を出航す。是より航路西北を目指す。

二月十六日。Ascension を左に見る。大きき聖厄列那許、飲み水なしといふ。

二月二十三日。赤道を越ゆ。

某日。某島に停泊す。周 Ascension かと訝ふ。周等郷書をこゝに留む。

三月二日。久しぶりに北極星を見る。

三月三日。某島を出航す。

三月九日。船、北緯二十二度、西経三十七度付近にあり。

三月十六日。午後、長さ七八尺ほどの鯨を見る。

三月二十二日。五月九日 欧羅巴の外海に入る。漸く冷なり。

こうした作業仮設を打ち崩し反証する学説の登場が待たれるところである。